

多和田葉子『献灯使』

片野修

多和田葉子は 1993 年に『犬婿入り』で芥川賞を受賞しているが、現在はドイツに住み、ドイツ語で詩集も出している。『献灯使』がアメリカでもっとも権威のある全米図書賞の翻訳部門に選ばれることによって、世界的に知られるようになった。村上春樹と並んでノーベル賞候補と言われている。その『献灯使』は恐るべき小説である。

115 歳になっても元気潑刺とした義郎は、東京の西域の仮設住宅で、曾孫の無名と暮らしている。無名は歩くことも食べることもままならず、蛸のように動いている。それは無名にかぎったことではない。この世界では環境が還元不可能なレベルまで汚染され、老人ばかりが健康で元気であるが、子供たちは体じゅうに障害を抱えている。

たとえば、無名は歯がもろいので、パンは液体に浸さないと食べることができない。飲む行為も楽ではない。黒目を回転させながら喉のエレベーターを必死で上下させ、液体が下へ送り込まれていくように努力しなければならないが、液体が逆流したり咳き込みが始まったりすることもある。膝のところから曲がってしまう鳥のような足を一步ごとに外側にひらくようにして前進する。男と女の区別は曖昧になり、誰でも人生のうちで一度や二度、性転換するようになっていた。

そんな未来があるものかと思われる読者がいるかもしれないが、水俣病やイタイイタイ病が公害とされたのち数十年以上たった現在、新たな環境汚染が生まれている。有機フッ素化合物は食品や土壌、地下水を汚染しているが、その正しい実態はまだ明らかになっていない。アユから検出されたというニュースが出たが、どここのどのようなアユなのか、政府は公表していない。PCB やダイオキシンは分解されにくいまま、海底にたまっている。メチル水銀は深海魚やサメなど食物連鎖の頂点に立つ動物に蓄積されており、これらの魚の大量摂食には警鐘がならされている。マイクロプラスチックは海でも陸地でもたまり続け、人間の住居やペットボトル飲料からも検出されることによって、人体に蓄積されていく。これから数十年たったときに、これらの汚染物質がどれほどの障害を人体にもたらすのかは、誰にもわからない。

多和田が描く未来社会では鎖国政策がとられており、外国との貿易は行われていない。どの国もそれぞれ問題をかかえているので、それが世界中に広がらないようにしたのだ。外国語の使用は禁じられている。野生動物はかなり前から消えており、貸し犬と猫の死体しか見ることにはできない。東京の街はしんとしており、土地の価値は失われていた。東京の環境に長時間さらされていると複合的に悪影響が出るので、二十三区を去る人が増え、ただし海の近くは危険なので、奥多摩から長野にかけての地域に移住する人が多い。北海道は移住を受け入れなくなった。

義郎は妻の鞠華と別居しており、鞠華は山の中で孤児のための学院を営んでいた。娘の天南は無農薬学を専攻し、夫婦で農業ができる沖縄に移住した。義郎にとって孫の飛藻が残さ

れたが、飛藻はつかみどころがなく義郎とは理解しえなかった。義郎は作家だったが、義郎の書いたものを飛藻が読むことはなく、ゲームや漫画だけを好んだ。やがて飛藻は美しい女性と結婚し、無名が生まれたが、出産三日後に彼女は死亡した。このとき飛藻は重度の依存症を治す施設に入っており、無名と会ったのち行方不明になった。結局、義郎のもとに残されたのは無名だけになった。

無名の学校の夜那谷先生は新しい価値観を教えてくれた。子どもが厠掃除をしてくれる老人たちに「ご苦労様です」と声をかけると、「ご苦労様というのは、雇い主が雇い人にかける言葉だったんだよ。君はあの人たちを雇っているわけではないだろう」と言った。「でも迷惑かけてるよね」と誰かが言うと、先生は「迷惑は死語だ。・・・文明が充分に発達していなかった時代には、役にたつ人間と役にたたない人間という区別があった。君たちはそういう考え方を引き継いではいけないよ」とたしなめた。

鞠華は優秀な子供を選び出して使者として海外に送り出す民間のプロジェクトの審査委員になったが、使者としてふさわしい子はなかなか見つからなかった。頭の回転が速くても、それを自分のためだけに使おうとする子は失格。責任感が強くても、言語能力が優れていなければ失格。口はうまくても自分のおしゃべりに酔う子は失格。他の子の痛みを自分の肌を感じるができる子でも、すぐに感傷的になる子は失格。意志が強くても、すぐに家来や党派をつくりたがる子は失格。人といっしょにいることに耐えられない子は失格。孤独に耐えられない子は失格。既成の価値観をひっくりかえす勇気と才能のない子も失格。なんでも逆らう子は失格。日和見主義者も失格。気分の揺れが激しい子は失格。

このあたりの表現は多和田らしいが、この社会ではまだ個性があって、AI なんかには支配されていないことにほっとする。一方で、それでも、やっぱり性格のよい子が好まれるのかとも感じてしまう。結局、すべての点で完璧なのは無名だけだった。

献灯使がインドのマドラスにある国際医学研究所に行くことに成功すれば、日本の子供の健康状態がきちんと研究され、世界中の子供の参考になるだろう。無名の命も伸びるかもしれない。無名は15歳になったとき、夜那谷先生の推薦もあって、献灯使になることを決断した。しかし無名は、義郎のことが気がかりだった。無名の意識の奥には、義郎も、先生だった夜那谷も、幼馴染だった睡蓮も入り混じって、不安の中で曖昧な世界が構築されていた。ここでストーリーは終わりを迎える。

この小説における多和田の想像力は果てしなく、描かれる世界は悲劇的である。しかし、部分的にはほっとすることもある。子どもたちには個性があり、それぞれの意志がある。体は不自由でも、それを悲観的にとらえない。鎖国をしている世界は、戦争ばかりしている現在の世界よりも健全に見えるかもしれない。他国を侵略することしか考えていない大国たちは、おとなしくなったのだろうか。他人を騙して得をしようとする人間はいなくなったのだろうか。

子供たちは、体が不自由でも、精神的に現在の人間よりもはるかに熟成されているように感じられる。現在、学校で蔓延しているいじめもなくなったように思われる。それでも無名

のように優れた子は少なかったとあるので、トラブルや嘘や不正はなくなるのだろう。人間の DNA はそう簡単に進化しないから、その社会も劇的によくなるとは考えられない。この点は『献灯使』では上手に解決されていない。

人間の寿命は年々長くなり、経済的に豊かで肉体的にも元気な老人が増えている。一方で、これから生まれる子供たちには、大きな負担が待ち構えている。増え続ける老人を、少ない若者が支えなくてはならないからだ。積み重なる赤字国債は国家財政を厳しくし、そのつけは将来の世代におおいかぶさってくる。他国に比べて乏しい科学研究費は、国際競争での敗北を予想させる。環境汚染物質や温暖化効果ガスの蓄積が、過去の世代によるものであり、将来の子供の責任ではないことは言うまでもない。多和田の献灯使は、この来るべき悲劇を、肉体的に衰えた子供の姿を通して暗示している。

日本の政府や企業がどうしているのかは描かれていない。そんなことは多和田にとっては、どうでもよいのだろう。小説の中で、この先、義郎と無名がどうなるのか、なんてことを考える必要もない。ただ、多和田葉子の描く世界を味わい、それを現在の世界と比べて何かを感じるのがよいと思う。